

つくり  
育てる漁業  
人と技術の  
ネットワーク

# ACN REPORT

NO.32 2010.JAN.  
AQUA CULTURE NETWORK

特定  
非営利  
活動法人

## ACNレポート 第32号

2010年1月30日発行

(毎年2回1月・9月発行)

編集／NPO法人ACN事務局  
発行人／田嶋猛(NPO法人ACN代表)  
〒833-0056 福岡県筑後市久富1343番地  
ACN事務局／クロレラ工業株式会社  
生産本部 技術特販部内  
TEL.0942-52-1261  
FAX.0942-51-7203

### 1. 新年の挨拶

NPO法人 ACN 代表 田嶋 猛

### 2. ACN養殖用種苗生産速報

NPO法人 ACN

### 3. 養殖概況

NPO法人 ACN

### 4. 防疫概況

株式会社 サン・ダイコー 古賀 輝三

### 5. 地中海地域での種苗生産の現状と今後

太平洋貿易株式会社 松本 美雪

### 6. ACN懇話会開催予定

2010年  
年頭のご挨拶

## 「2010年 国を挙げて 養殖魚輸出奨励の年に」

NPO法人 ACN 理事長 田嶋 猛  
(アクアカルチャーネットワーク)



新年明けましておめでとうございます。

読者の皆様方には平素よりACNの運営等にご協力いただき、厚くお礼申しあげます。

年末来、明るい話題のない養殖業界ですが、50%以上の在池量を抱えて年を越すと、予想されたトラフグですが、価格低下の影響で12月後半に出荷が進みました。その結果、1月初旬の在池量は30%を切って予想より低くなっています。昨年12月に一気に2,000円/kgを切った価格も、底を打った感があります。しかしながら、日本の株式市場同様に上値は重く、一進一退で徐々に上向くといったところでしょう。トラフグ以外では昨年の種苗導入量が減少していたカンパチやヒラマサが堅調です。また、シラスウナギの不漁が続き、国内の在鰐価格だけでなく、台湾、中国からの輸入価格も上昇してきています。しかしながら、この業界での価格上昇の要因は、現物が減少したときの一時期のみで、一部の生産者は少しだけ潤いますが、業界の総売上高は増加しないという、まさに縮小を続ける市場の典型となっています。配合飼料メーカーにとっては、中国等の買い付けで魚価格は上がり、種苗生産業者にとっては加温用重油価格の上昇など、コストアップがあるものの、とても養殖生産者に転嫁できる状況ではありません。「仕入インフレ、販売デフレ」の継続で、資金力のない会社は淘汰されますが、ライバルの廃業をじっと待つ業界に発展はなく、縮小均衡

の繰り返しとなります。

それでは、視点を日本之外に移してみると、どうでしょうか。中国は言うに及ばず、昨年末訪問した韓国済州道のヒラメ養殖業者は対日輸出への期待よりも、韓国内での販売を重視し、自信を持っていました。インドネシアやフィリピンも政治的な安定で、着実な経済成長が望めますし、ベトナム、カンボジア、ラオスが続きます。

こうしてみると、日本市場だけが、デフレという負のオーラが充満した、重苦しい雰囲気の中で、周辺国から取り残されて行きそうです。本来、養殖魚は嗜好品に属するもので、ハンバーガーや牛丼のように、満腹感を要求されるものではありません。したがって、それらと同じ土俵で価格競争をしても無意味ですし、品質を落とせば、若年層の魚離れを助長するだけです。

このように、嗜好品として正当に評価する市場の縮小に対しても、大間のマグロが香港の寿司屋にセリ落とされるように、海外に市場を求める以外はないと思います。

この数年間の荒波に揉まれた国産養殖魚は、肉質&加工技術向上とコスト低減で、欧米やアジアでの競争力を、着実に増してきています。このように技術力はありますが、海外へ突破する力は今一步と思います。今こそ、政府は養殖魚輸出奨励のため、輸送技術、通関の簡素化、現地試食会開催等の具体案を策定して頂きたいと考えます。

年 次	ギンザケ	ブリ類	マアジ	シマアジ	マダイ	ヒラメ	フグ類	その他の	魚類計
H11 (1999)	11,148	140,411	3,052	2,935	87,232	7,215	5,100	7,344	264,436
H12 (2000)	13,107	136,834	3,052	3,058	82,183	7,075	4,733	8,631	258,673
H13 (2001)	11,616	153,075	3,308	3,396	71,996	6,638	5,769	7,991	263,791
H14 (2002)	8,023	162,496	3,462	2,931	71,754	6,221	5,231	8,287	268,406
H15 (2003)	9,208	157,568	3,377	2,313	83,002	5,940	4,461	8,049	273,918
H16 (2004)	9,607	150,068	2,458	2,668	80,959	5,241	4,329	6,951	262,280
H17 (2005)	12,729	159,741	2,329	2,738	76,082	4,591	4,582	6,129	268,921
H18 (2006)	12,046	155,003	1,977	3,300	71,141	4,613	4,371	5,930	258,383
H19 (2007)	13,567	159,750	1,773	3,211	66,663	4,592	4,230	8,289	262,073
H20 (2008)	12,800	158,300	1,700	2,700	71,000	4,200	4,100	7,900	262,700

### ■海面養殖業 魚種別収穫量

(農林水産省HP 統計データ)

単位：トン

備考：ブリ類 ブリ カンパチ  
そ の 他

## 1. マダイ

昨シーズン（2008年9月～2009年8月）は、成魚の販売低迷の影響を受け、養殖用種苗尾数は4,330万尾（前年比26%減）となった。その後もマダイ養殖業界の経営改善は見られず、養殖業者の種苗導入意欲は依然として低水準である。

夏越し種苗（立仔）の2009年9月～12月の販売数量は518万尾で、種苗業者での在庫は70万尾程度と推察

される。今シーズンのマダイ種苗生産もスタートし、2009年9月～12月での生産は近畿大学、山崎技研など15社で2,690万尾（沖出種苗含む）であった。実際の養殖用種苗としては、選別等により相当数が省かれ、約半数になると思われる。昨シーズン年並みの仕込み量でスタートしたが、今後の増加要因がなく最終的な養殖用種苗尾数としては減少すると思われる。

## 2. トラフグ

2009年9月～12月に2社が採卵し、早期種苗の生産は近畿大学の15万尾だけであった。そのうち年内出荷は6万尾で、依然として早期物を導入する養殖業者は少ない。早期種苗生産は、小ロットのためコスト高となり敬遠されており、本格的な種苗出荷は4月以降に集中すると思われる。

上記2社以外は12月から養成親魚を仕立て、1月上旬準備に入り、2月上旬から採卵となる。その理由は低水温時期を避け、3月下旬から4月上旬沖出し

するためである。

年末に懸念された大量の成魚の越年が回避されたことは種苗業者にとっては朗報であった。今後の状況としては、1月～2月採卵分は例年通りで、3月採卵分より生産調整を検討している種苗場が多く、昨年の20%減で生産計画を立てている種苗生産場も数社ある。

中国では、最も人気のない魚種がトラフグと言われており、日本でのトラフグ相場の暴落を受け、中国国内消費に向いた魚種の種苗生産が増加する模様。

## 3. ヒラメ

2009年9月～12月の養殖用種苗出荷尾数はまる阿水産、長崎種苗など民間8社で昨シーズンより微増の130～140万尾であった。出荷サイズは8～9cm upとやや大型化種苗で、浜値は昨シーズン同様90円/尾である。

成魚の販売は韓国産に押されており、国内相場は韓国産で決まるようである。現在の浜値1,100～1,200円/kgは昨シーズンより高値であるが、種苗から成魚

までの生残率の低下で、養殖業者にとって厳しい経営状況が継続している。

今後の種苗導入は昨年池入れが遅れたため、成魚出荷も遅れており3月以降に集中するものと思われる。養殖業者は種苗導入にあたって、韓国ヒラメの輸入動向と国内景気減退の影響から目が離せないところである。

## 4. シマアジ

例年通り昨年内のノグチフカの採卵に続き、近畿大学や山崎技研も生産は順調である。そして、1月に入りマリーン・パレスも採卵、仕込みを終わっている。

ここ数年、マダイなど多くの魚種で成魚価格の低

迷や販売不振が続く中で、シマアジの魚価は安定していたことから種苗への需要が高まり、昨シーズンは幾つかの業者で前年より増産の計画にてシーズン入りした。しかしながら蓋を開けてみると、マダイ

種苗の生産時期と重なることから急な増産は設備面で困難であり、さらに一部業者では計画通りの歩留まりが得られなかつたこともあって当初予想された尾数には至らなかつた。とはいへ前年より増加し、376万尾の出荷実績となつた。

今年度も種苗の引き合いが続くと予想される中、大手種苗生産業者を中心に増産体制の動きが見られており、マダイ種苗の更なる減産傾向がシマアジへのシフトを後押ししていると推測される。その一方で、生産に入ってから急遽注文が弱まつたとの声が一部で聞かれ、養殖業者も導入について流動的な面が垣間見られる。また、例年1月以降の採卵状況や歩留まりによって生産尾数が変動していることから、最終的な尾数は計画から前後すると見られるが、昨

シーズンを上回る見込みは大きい。

ACNの集計では、民間6社、公的3事業所にて450万尾前後が予想されており、各業者が順調に生産すれば500万尾に達する可能性もある。

シマアジ種苗の増産は2年連続であり、数年後の成魚市況への影響が懸念される。

お詫び：ACNレポート2009年9月（第31号）にてシマアジ種苗出荷尾数を337万尾と記載しましたが、その後の調査にて民間1社の出荷尾数を実際より少なく集計していたことが判明したため、2009年養殖用シマアジ種苗出荷尾数を376万尾に訂正します。読者の皆様にはご迷惑をおかけしましたことを、お詫び申し上げます。

## 5. クロマグロ

黒鮪

近畿大学はじめ民間5社、公的2機関が2009年7月以降、種苗生産に取り組み全長40～90mm（30～40日齢）で約13万尾を沖出した。90日齢（300～500g/尾）

での沖出し後の生残率は0～25%であった。

文中社名敬称略

# 養殖概況

2010年1月

## 1. マダイ

真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛

長引くマダイ魚価低迷は、一向に回復の兆しを見せず、2009年夏以降も下落傾向で推移した。夏から秋にかけ550～500円/kgだった価格は、年末には400円台に突入し480～450円/kgが主流となり、大型サイズでは400円/kg前後も聞かれるまでに下落した。この様な価格ではマダイでの養殖経営は困難であり、消費低迷、価格安により、マダイ養殖業界はさらに厳しい状況へ追い込まれている。2008年に比べると在池量は少なくなっているものの、現状では近い将来の好転は望まれず、生産量減、他魚種への転換な

ど様々な変動が推察される。

2009年は、エドワジェラ症による斃死被害が依然として大きく、歩留り低下の最大要因となっており、本症の対応策が強く望まれている。高水温期のイリドウイルスによる発症は少なく、大きな被害は発生しなかつた。新たな問題としてハダムシ寄生が多く聞かれるようになり、消毒作業などの負担が増えつつある。

マダイは飼い難く、売れ難い魚種となっており、景気回復、消費拡大が何より望まれるところである。

## 2. トカラフグ

虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚

2009年は種苗導入時のシュードカリグス症や夏場の赤潮被害が一部地域であったものの9月以降は順調に生育している。

2008年末からの在池成魚が2009年3月に入ると1,500円/kgまで下がって、中国産と同価格となり、その多くが冷凍加工品として春までに潤沢にストックされた。

また、7月～9月には500g～700g/尾が途切れることがなく市場に出た為、加工業者はいつでも国産の入手が可能となり、価格の上昇へ歯止めをかける結果となった。

本格シーズン開始の10月でもキロ物で2,000円/kgと弱含みな相場は、不景気に天然物の豊漁も重なり、11月には1,300円～1,500円/kgとなり、12月に入ると1,200円～1,300円、年末には1,000円/kgまで下げた。しかしながら、価格低下のため出荷は予想以上に進

み、年明け在庫量は25%といわれるまでになり、弱いながら上げ相場となってきている。

このように順調に出荷されたトラフグの多くは、一般消費に回り、残りは加工後冷凍保管されていると推測される。あるトラフグ外食大手は安い時に一年分を確保したとの噂もあり、今後の相場を見通す上で、冷凍品の在庫量がキーポイントになると思われる。

### 3. ヒラメ 平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目

韓国産成魚の大量輸入により2009年2月には800円/kgを割り込んでいた成魚相場（浜値）は、ウォンの上昇とともに4月以降回復基調となった。2008年9月～12月の早期種苗導入尾数（106万尾）が前年比の約5割であったことも影響して、2009年8月以降には品薄気味となり1,500円/kgまで回復した。しかし、国内のデフレと消費量減の影響は避けがたく、種苗導入尾数の大幅な減少や韓国産の輸入急増がないにもかかわらず、以後の成魚相場は1,200円/kg前後と下げ気味である。

主産地である大分県では種苗導入尾数減少の影響と思われるが、エドワジエラ症、新型連鎖球菌症等

の疾病被害は少なかった模様である。なお、数社がヒラメ以外にカワハギやトラフグを導入した。

#### 【参考資料】

韓国から下関港と大阪港に輸入された活魚は大部分ヒラメであり（月刊『養殖』2008年4月号 19P）、2港の合計数量は韓国税関庁の活ヒラメ輸出量（月刊アクリアネット2009年4月号 63P）ともほぼ一致する。図1は財務省貿易統計品目「その他の魚(生きているもの)」から作成したグラフである。輸入単価と国内成魚相場（浜値）がほぼリンクしており、韓国産ヒラメ輸入価格が国産に与える影響が大きいことが分かる。

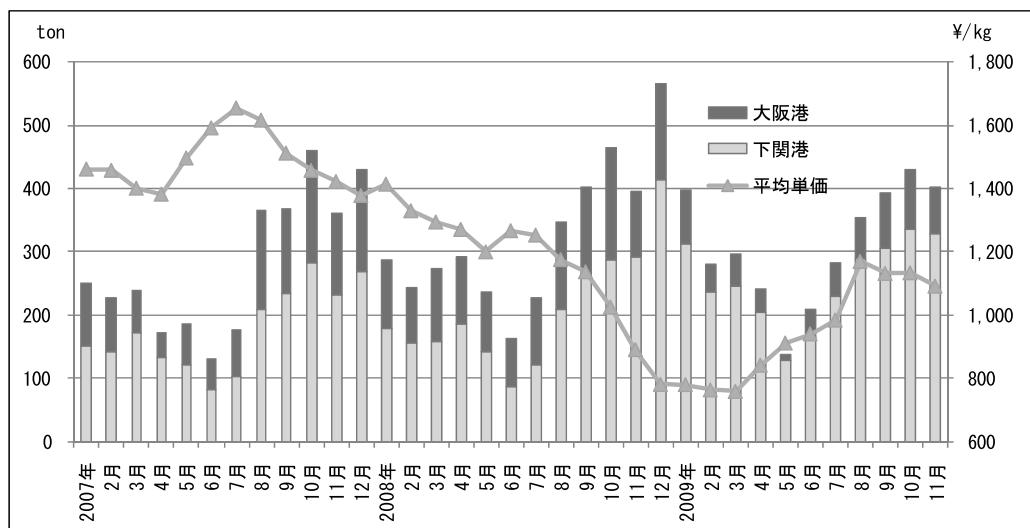


図1 韓国からの輸入活魚（ヒラメ等）の数量と単価

資料：財務省貿易統計

### 4. ブリ・ハマチ 鮪・鮭鮓 鮪・鮭鮓 鮪・鮭鮓 鮪・鮭鮓 鮪・鮭鮓 鮪・鮭鮓 鮪・鮭鮓

昨年のモジャコ採捕は、当初の4月中旬は不漁が続いたものの、5月下旬より小サイズを中心に良く採捕され、特に東シナ海側では近年にない豊漁となっ

た。その一方で8月には長崎県、熊本県に続き鹿児島県で赤潮が発生し、ブリ2年生、3年生が大量斃死する被害が起きた。

魚病被害については、例年同様にレンサ球菌症、黄疸、ノカルジア症などの発症があったが、その中でもノカルジア症が以前より増加しているとの指摘があり、背景として魚価低迷による給餌制限や飼料の安値志向が影響しているのではとの見方もある。

生産物相場は天然ブリの豊漁やカンパチ価格低調の影響を受けて、昨年1月～5月にかけては600円台/kg前半の低価格で推移した。その後、6月頃より在

庫品薄感とカンパチ価格の上昇に引っ張られて、ブリ価格も750円～800円/kgまで上昇したものの、10月以降は新物の安定供給や天然ブリの豊漁を受けて弱含み、年末には600円前後/kgとなった。

赤潮被害による在庫減は未だ生産物価格に反映されておらず、その他の養殖魚種同様に景気低迷の影響を受けており、今年もブリ養殖は引き続き厳しい状況が続くことが予想される。

## 5. カンパチ

例年では全国で約1,000万尾が導入されている中で、昨年のカンパチ導入数は、厳しい経営状況における養殖業者の規模縮小意識の高まりと中国での大量斃死による供給不足の影響を受け、前年比2割減の約800万尾と言われている。

生産物相場は2009年1月時点にて720円/kg（鹿児島地区）であったが、経営改善対策として4月より产地主導による価格引き上げが実施され820円/kgまで上昇した。その後も、価格は徐々に上昇し10月に880～900円/kgとなったが、以後はブリ生産物価格の低下

による影響を受け、横這いもしくは若干の下げ傾向となった。

この产地主導による価格引き上げの影響で、荷動きは鈍化傾向を示した。しかしながら一昨年の導入尾数が少なかったため、年末における在池量は品薄感があり、特に出荷最適サイズである3.5キロ物の不足の声が聞かれた。よって、年明けの相場は若干の上げ傾向となっている。

今後は品薄による強含みが期待されるものの、不況による荷動きの鈍さが懸念材料である。

## 6. シマアジ

シマアジの浜値は1,500円/kgで保合状態が続いているが、相場が上下しているブリ、カンパチや、低迷が続いているマダイと異なり、養殖魚の中では特異的な存在になっている。

その一方で、他の魚種と同様に不況による消費低迷の影響を受け、市場での取引数量や価格は前年比割

れの傾向となっている。安定した浜値を受けて種苗導入が昨年から増加しているが、この種苗が出荷サイズになる数年後は需要と供給のバランスが崩れることが予想され、養殖業者にとってもメリットがない魚種になることが懸念される。

## 7. アユ

2009年の東京市場への出荷量はほぼ前年並みであったが、平均単価は1,388円/kgと前年を約200円/kg下回った。特に後半の子持ちアユ主体で取り引きされる時期では前年比300～500円/kg安と大きく下げ、多くの業者が採算割れの状態となった。この原因としては、不景気の影響もあるが、それ以上に需要落ち込みが大きい事が考えられる。

現在各池では種苗の導入時期を迎えており、琵琶湖の特別採捕は今回も方式が変更となり、昨年12月1日からの1回となった。採捕数量は、例年の40tより約10t少ない30tで12月上旬までに採捕し終漁

した。種苗の状態は、全体的に小さいが、現在までのところ生育状況に問題はないようである。人工種苗は順調に生産され、各地に池入れされているが、一部では池が空く時期が遅れたことによる導入遅れがみられる。

このような状況に加え、廃業等もあることから、今期の生産量は、昨年以上の減少となりそうである。生産量が減少しても、この不況下では大幅な価格上昇は期待出来ないと思われる。そのため生産者には、疾病対策等歩留まり向上による原価圧縮と、新たな販売ルートの開拓が必要となってきている。

# 防疫概況

(株)サン・ダイコー 古賀輝三

2009年の防疫関連を振返ってみると、まずオイルアジュバンドワクチンの認可であり、他にノカルディア症・エドワジェラ症・寄生虫症の増加および鹿児島湾における新型連鎖の減少の三つが特徴的だったと考えます。

以下、かなりの私見を含んでおりますが個別にご報告申し上げます。

## ①オイルアジュバンド使用

前回のレポートにてオイルアジュバンドワクチンの実際と表して愚報を記載させていただきましたが、その後の経緯も順調に推移しています。一部、ワクチン接種直後の斃死や摂餌量の減少についての問題があったところもございますが、総合評価としましてもまずまずと感じています。ワクチン効果を充分に発揮させるには、ワクチン接種日前後の養殖管理が重要であることを再認識されました。

今後は、いよいよオイルアジュバンド等を含んだ多価ワクチンの時代になっていくことが実感された年でした。

## ②ノカ・エド・寄生虫の増加

最近、各地区共に増加傾向の病気、しかも対応が難しい病気や対処に手間が掛かる病気として、ハマチ・カンパチのノカルディア症、タイ・ヒラメのエドワジェラ症また、全魚種に対しての寄生虫症が上げられますが、それらの病気が確実に増加している傾向が見られます。本当に顕著になっている感があります。

特にノカルディア症では、例年発生する地域は別としましても、それ以外の地域でも、感染地域からの中間魚の移動によるものばかりでなく、地元採捕の稚魚からでも発生しているのではないかとの話も上がってきています。確実にノカルディア症やエドワジェラ症は年々増加し、しかも発症地域が拡大してきているようです。このことは非常に心配になりますが、一昨年にノカルディア症対策としてサルファ剤が認可されましたので、かなり抑制できているようです。しかしながら、他の疾病と相異して、薬剤投与すれば必ず一度で完治するものではなく、初期投薬が原則と感じています。

またエドワジェラ症は蔓延化傾向です。これも薬剤感受性があってもダラダラ発症が継続する病気です

ので日頃の管理が重要になってきます。

寄生虫に至っては網管理などの環境管理が重要ですが、ノカルディア症・エドワジェラ症共に個体の体质管理、いわば病気から身を守る体力と皮膚や消化器官のバリア保全も必要と感じます。

予防に勝る疾病対策は無いということが生物種を問わず言えることと思います。

## ③鹿児島湾における新型連鎖の減少

この事は一地域の現象ですのでいささか気が引けますが、養殖全般に関わる問題として報告致します。鹿児島湾でのこの1年の振り返りを聞きますと、カンパチのイリドウイルス症がシーズン後半に多発した、またノカルディア症の増加も顕著であったが認可されたサルファ剤の投与によってかなり抑止できているとの情報が入ってきています。

しかしながら、一番の変化は新型連鎖の減少が特徴的だった模様です。理由は投与餌料の質の変化により、給餌量が減少したことによる漁場負荷の減少では無いかとの推測が上がっています。

この推測は充分に考えられることで、ぶり類の類結節症が生餌からMPさらにEPへと飼料の改革による漁場への負荷量の減少により減少してきた大きな流れ（これはあくまでも私見です。但し、ここ2~3年の増加傾向は別の原因と考えます）とも重なるような気がします。

いずれにしましても、養殖の基本はある意味、全体管理と個別管理だと思います。全体管理とは漁場管理であり漁場全体の放養尾数に絡むDOバランスや底質を含んだ富栄養化阻止等がこれに当り、個別管理は各生簀管理や生簀内の放養尾数等が上げられます。これらの適正管理と養殖魚への適正な栄養分補給がマッチングしてこそ病気の少ない養殖が実現するのではないでしょうか？

## 地中海地域での種苗生産の現状と今後

Present and future status of Mediterranean fry production

Pavlina Pavlidou Hatcheries Division Manager Selonda

Finefish newsletter Issue No.6 (2009年11月発行)

訳：太平洋貿易(株) 松 本 美 雪

Seabass(学名：Dicentrarchus labrax 和名：ヨーロッパスズキ 以下スズキ)とGilthead seabream(学名：Sparus aurata 和名：ヨーロッパヘダイ 以下ヘダイ)は、地中海地域で海面養殖されている主要な魚種である。これら二魚種の生産量は、ここ数十年で徐々に増加してきており、種苗生産技術の向上がその要因の一つとして挙げられる。より高品質な種苗を供給し、また、生産コストを最小限に抑えるために、種苗生産の技術は現在も発展し続けており、それは、地中海地域の海産魚養殖にとって非常に重要な意味を持つ。

### 〔種苗生産技術が向上したことによって、〕

- －魚種・数量共に、養殖場が必要とする種苗を確保できる。
- －種苗の質が安定しており、良好な成長が保証されている。
- －垂直的に統合された企業体での種苗生産コスト削減に寄与し、高い種苗販売利益(種苗1尾あたり約10€)と種苗の質の向上(奇形がないこと、生産サイクルの短縮、餌料効率の向上、斃死率の低下)によるコストの大幅な削減(成魚価格1kgあたり30–35€の利益上昇)をもたらした。
- －新魚種の生産の可能性が拡大した。

地中海地域での種苗生産量は、1998年の3億8千万尾から2007年の10億尾以上(伸長率175%)と、過去10年にわたって安定して伸びてきた。しかし、2009年の生産量は、昨今の魚価の下落を反映し、前年比25%減の7億5千万尾程度と予想されている。2009年以外で唯一生産が前年割れしたのは2004年であり、これは2001～2003年に起った魚価の下落が原因である。一方、この期間の種苗価格は、1998年26€/尾→2009年20€/尾弱/尾(下落率23%)と比較的安

定している(図1)。

地中海地域でスズキとヘダイを生産している主な国は、ギリシャ、トルコ、イタリア、スペインそしてフランスである。2004年から2007年にかけて、ギリシャとトルコは種苗生産量を飛躍的に増加させ、ギリシャの種苗生産量は2007年に4億5千万尾に達した。しかし、2009年時点では生産量が減少し始めており、最終的に2004–2005年レベルまで落ち込む見込みである。トルコでも同様の傾向が見られ、これは両国が同じような生産パターンを辿っていることを意味する。一方、イタリア、スペイン、フランスの三国の種苗生産量は、各国とも1億尾を越えない程度である(図2)。

### 〔種苗生産が魚価に及ぼす影響〕

スズキ・ヘダイの主要生産国であるギリシャの種苗生産量の推移を分析すると、二魚種の合計生産量のうちヘダイの占める割合が2004年から2007年にかけて大幅に増加していることがわかる。この間、スズキの種苗生産量はほぼ横ばいであるが、ヘダイについては、2007年に過去最高となる3億2千万尾に上っている。このヘダイ種苗生産量の大幅な増加の結果として、2007年に4.0€/kgだった魚価が、2008–2009年シーズンには3.3€/kgまで落ち込んだ。在庫過剰にならなかったスズキの魚価に関しては、この間も比較的高い水準で推移した(図3)。

よって、2008–2009年シーズンのヘダイの魚価下落は、養殖業者がヘダイの稚魚を大量に導入したことにより過剰在庫を抱えてしまい、結果的に需要と供給のバランスが崩れたことが大きな原因のひとつであったことがわかる。

## 〔業界の再編〕

2003-2004年に魚価の暴落が起こってから目立っていた企業合併の動きは、2008年のヘダイ価格の暴落によってさらに加速するものと思われる。2004年に78あった地中海地域の種苗場の数は、過去5年で61まで減っており、2008-2009年シーズンは、ギリシャで6箇所、トルコで4箇所の種苗場が操業を停止している。ギリシャでは、22箇所の種苗場のうち、3分の1に当たる8箇所がギリシャの大手2社に属しており、2009年シーズンはこの2社でギリシャ全体のヘダイ・スズキ種苗生産量の62%に当たる2億尾を生産する見込みである。また、これら2社とは別の大手3社合計で、ギリシャ全体の生産量の28%を生産する予定であり、従って、この5社合計で全体の9割を占めることとなる。

## 〔結 び〕

魚価の暴落による業界再編と世界規模の金融危機の二重の影響を受け、今後も種苗場の稼動数は減ると見られる。この状況は、地中海地域の種苗生産業界で、今後更なる経営統合の動きを加速するのではないかと考えられる。また、企業の垂直統合によって効率化が図られた結果、第三者販売は今後減少すると見込まれている。この難局を切り抜けるまで、各種苗生産業者は、高い在庫水準を維持し、大きなサイズの種苗の供給力を強化するために、大規模な中間養殖場の運営に動いてくると考えられる。また、生産と種苗の質を向上させるべく、選抜育種の定着や生産技術の発展のための新たな研究プロジェクトに、更なる投資が行われると予想される。また、多様な選択肢を市場に提供し、各社の競争力を高めるためにも、新魚種の生産が注目されるだろう。



図1 地中海地域の種苗生産量と種苗価格の推移(2009年は推定)



図2 ヘダイ・スズキ主要生産国での種苗生産量(百万尾、2009年は推定)

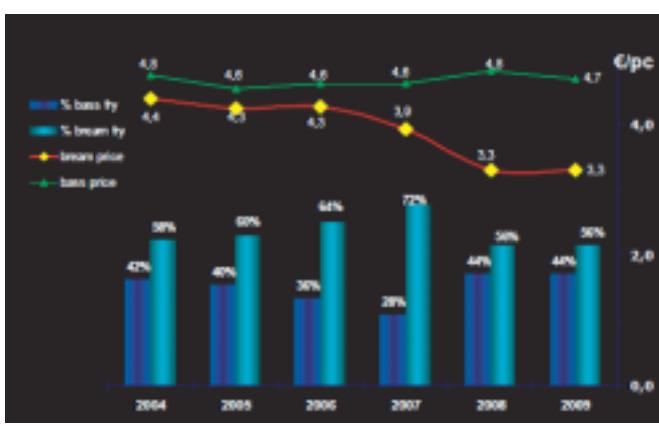


図3 ギリシャでのスズキ、ヘダイ種苗生産シェア(%)と成魚価格(€/kg)

## —— NPO法人ACNの本年度事業ご案内 —— 第8回ACN懇話会開催予定

- 開催日時：2010年8月頃を予定
- 開催県：愛媛県松山市で開催予定

※詳細等については7月頃案内状発送予定。